

Title	韓国長老派教会におけるニーバー理解：韓国基督教長老会を中心にして
Author(s)	高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3 : 9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4491
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

韓国長老派教会におけるニーバー理解 —韓国基督教長老会を中心にして

高 萬松

はじめに

前回の聖学院大学総合研究所*News Letter*には、「賀川豊彦から影響を受けた一人の韓国人牧師」と題する研究ノートが掲載されている¹。そこでは韓国基督教長老会の姜元龍（1917–2006、かん・うおんよん）牧師が中心とされている。

今回はラインホルド・ニーバー思想と韓国の牧師たちとの接触について考察する。前回と同じく姜元龍と、そして彼の師であり、韓国基督教長老会という教団を立ち上げた金在俊（1901–1987、きむ・じえじゅん）牧師を中心にしたい。両者とも日本の教会と関わりを持った人物である。

日本では上記教団の神学路線が自由主義神学に傾斜していると見る傾向が見られる。例えば古屋安雄が『日本のキリスト教』において民衆神学者たちを生んだ韓国の関連教派を「自由神学者」のグループと見なしている²。しかし本考ではそのような表現に疑問を抱いている。

1 姜元龍におけるニーバー理解

姜元龍は後述する金在俊の弟子である。金在俊の影響によって聖書を読む方法が変えられ、ラインホルド・ニーバーからの影響によって社会を見る眼目が開かれた、と姜元龍は彼の自伝で述懐している³。姜元龍はどのようにしてニーバーに関心を持ったのか。そこには日本のキリスト者との出会いがある。すなわち、「私がラインホルド・ニーバーに関心を持ったのは1948年に韓国基督教青年代表として日本に行った時に、日本YWCA学生部幹事であった武田清子女史に出会ってからである」と姜元龍は言う⁴。彼の日本への訪問は戦後初めてのキリスト者の訪問と見てよい。そしてその頃、ニーバーの『光の子と闇の子』⁵が武田によって訳されていて、武田との出会いは「2年間彼[ニー

バー]の弟子」となるということと、それ以降ニーバーから影響を受けるきっかけとなったのである⁶。

姜元龍は彼の自伝において「どのように行動すべきか一師ニーバーの教え」と題する項を設け、6頁を割愛している⁷。その中ではニーバーの思想が「伝統[的な]神学の原罪論を受容しているため、人間の道徳的・倫理的可能性に対する楽観論を拒否する」こと、ニーバーの言う「不可能の可能性」(impossible possibility)⁸の意味、「謙遜」の意味などが言及されている。姜元龍は牧師として社会活動に活躍した人物と見るができるが、そのような彼はニーバーの「社会正義と愛とを繋いだ思想」から大きな影響を受けたとする⁹。すなわち、「あなたの隣人を愛しなさい」という戒めを受けているキリスト者が愛を主張しつつ正義に対して無関心なことは真の愛ではなく感傷主義に過ぎず、他面社会正義を実現するために努力する人々が愛という管を通さなければその正義は正義ではなく不正となるというニーバーの思想であったのである。

2 金在俊におけるニーバー理解

「韓国基督教長老会」という教派が金在俊によって作られたように、彼は韓国長老派教会において指導的な牧師の一人であり、その影響力も強かった。金在俊が『キリスト教と文化』¹⁰を訳したように、彼にはニーバー兄弟の思想を重んじている傾向が見られる。

金在俊は1962年に『思想界』という韓国のキリスト教雑誌に「キリスト教と政治」と題する寄稿文を書いている¹¹。それは金在俊におけるラインホルド・ニーバー理解のための重要な資料となる。その中ではニーバーが「現実の人」と呼ばれており、民主主義と共産主義、戦争と平和、そしてニーバーの歴史理解について言及されている。本稿では民主主義についての言及に絞りたい。ニー

バーは「正義を実行し得る人間の力がデモクラシーを可能にするものであるが、他面、人間の不正に陥りやすい傾向がデモクラシーを必要とする」(Man's capacity for justice makes democracy possible; but man's inclination to injustice makes democracy necessary.)¹²と言ったことがある。金在俊はこのような見方を「預言者的」なものとして高く評価している¹³。

次にもう一点は、金在俊がニーバーの*Christian Realism and Political Problems* (1953) において、民主主義へのキリスト教の3つの洞察に注目する点である¹⁴。すなわち、第一は個人がこの世の権威を否定することの権威の源泉を持っている。第二は人格を目的と見る個人の尊厳性。第三は人間の自由を創造的であると同時に破壊的なものと見て、人間の尊厳と悲愴が同じ根源を持つとする。この民主主義とキリスト教との関係において、民主主義が要請する寛容はキリスト教の謙遜なしに維持することができない、というニーバーの思想に金在俊は共感している¹⁵。

3 彼らの神学について

古屋安雄は『日本のキリスト教』において「民衆神学」者たちを生んだ韓国の関連教派を「自由主義神学者」のグループと見なしている。すなわち古屋は「戦後に『民衆の神学』が出てきたのは、日帝〔日本帝国主義〕時代に日本と妥協した、そして日本の教会の神学の影響を受けて居る『自由主義神学』の長老教会とメソジスト教会であった」と言う¹⁶。韓国で民衆神学は韓国基督教長老会と深く関わっており、もし古屋教授が「自由主義神学の長老教会」を韓国基督教長老会と意識したとすれば、その表現には誤解を招く余地があると思われる。

近年、金在俊神学の再評価が行われている。それは金在俊が新正統主義神学の特徴の持ち主だったということである。金在俊は韓国の長老教会の分裂の当時、カール・バルトを自由主義者と見な

している根本主義者たちから批判を受けて除名された。除名の理由は金在俊が聖書無謬説と聖書の高等批評を受容れたからである。これによって韓国教会が分裂されたわけである。実際聖書の高等批評を認めていた彼は、聖書が神の言葉だということは信じていた。それゆえ、長老会神学大学校の金明容教授は近年の『カール・バルトの神学』において「彼〔金在俊〕の神学を全体的に見ると、バルト神学と新正統主義の特徴が強い人であった。金在俊の神学はプリンストン神学校とアメリカ長老教会の観点で見ると大きく問題視することはなかった」と言っているのである¹⁷。金明容の見方に従いつつ、前述のようなニーバーと親近性を持つ金在俊と姜元龍の神学は「自由主義神学」より「新正統主義神学」に傾斜していると言えよう。

- 1 高萬松「賀川豊彦から影響を受けた一人の韓国人牧師—姜元龍を中心にして」、『聖学院大学総合研究所News Letter』Vol.22, No.2, 2012, 2-3。
- 2 古屋安雄『日本のキリスト教』教文館、2008年、57頁。
- 3 姜元龍『歴史の丘の上で 2』ハンギル社、2003年、250頁 [강원용 「역사의 언덕에서 2」 한길사]。
- 4 同上。
- 5 ラインホルド・ニーバー『光の子と闇の子』武田清子訳、新教出版社、昭和23年。この訳書の発行日は昭和23年5月23日となっており、武田はこの本を姜元龍にプレゼントした。
- 6 姜元龍、前掲書、250頁。
- 7 姜元龍、前掲書、250-255頁。
- 8 同上書、251頁。詳細については、高橋義文『ラインホルド・ニーバーの歴史神学』聖学院大学出版会、1993年、194頁を参照されたい。
- 9 同上書、252-253頁。
- 10 リチャード・ニーバー『キリスト教と文化』金在俊訳、大韓基督教書会、1958年 [리처드 니버 「그리스도와 문화」 대한기독교서회]。そして以下のような訳書からも金在俊の神学的傾向を表わしているであろう。H.R.Mackintosh, *Types of Modern Theology: Schleiermacher to Barth*, Collins Clear-Type Press, 1937 [매킨토쉬 「현대신학의 선구자들」 대한기독교서회]。

- 11 金在俊『金在俊全集 5』ハンシン大学出版部、1992年、398-407頁 [김재준 「김재준전집 5」 한신대학출판부]。
- 12 Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of its Traditional Defense*, Charles Scribner's Sons, 1960, xiii (訳語は、R・ニーバー『光の子と闇の子』武田清子訳、聖学院大学出版会、1994年、7頁から引用)。
- 13 金在俊、前掲書、403頁。
- 14 Reinhold Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems*, Faber & Faber Limited, 1953, 99-100.
- 15 金在俊、前掲書、404頁。
- 16 古屋安雄『日本のキリスト教』教文館、2008年、57頁。
- 17 金明容『カール・バルトの神学』イレ書院、2007年、318頁 [김명용 「칼바르트의신학」 이레서원]。

(こう・まんそん 聖学院大学総合研究所助教)